

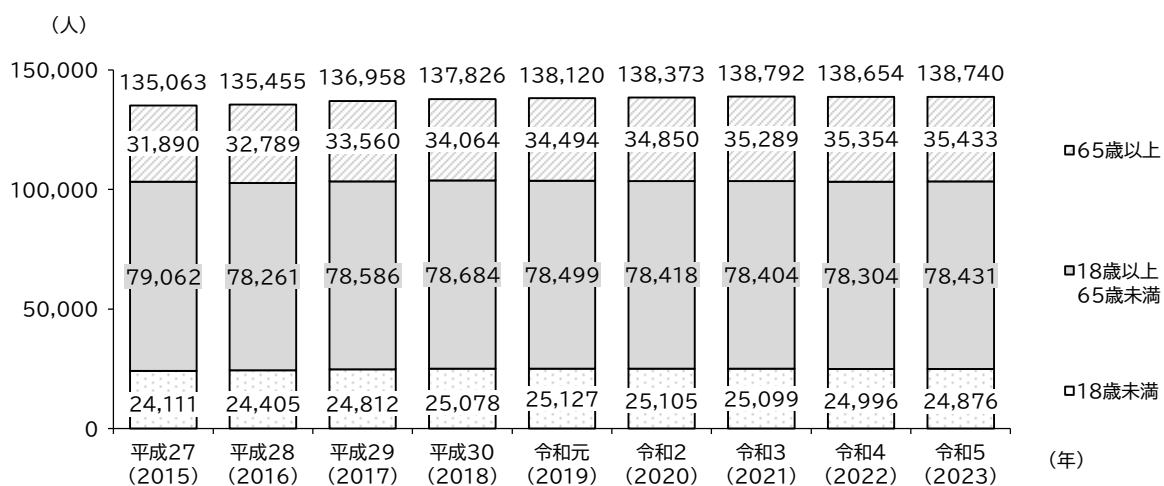
第2部 障害者市民の現状とこれまでのふりかえり

第1章 障害者市民の状況

1 総人口の推移

本市の人口は、微増横ばい傾向で推移しています。65歳以上人口は年々増加しています。

【図1:総人口の推移】



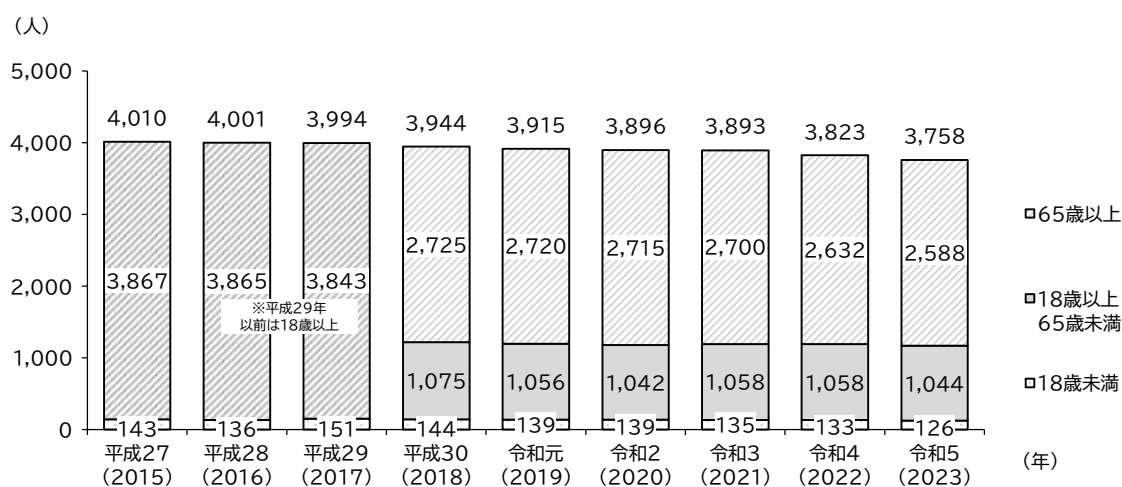
2 障害者手帳所持者等の推移

(1) 身体障害者手帳所持者数

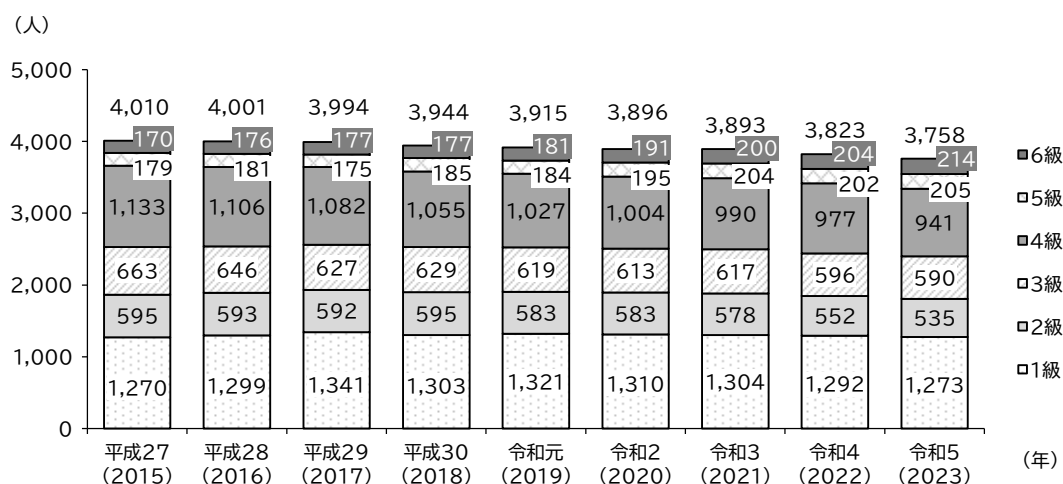
身体障害者手帳所持者数は減少傾向が続いており、年齢別では、65歳以上の人数が特に減少しています

等級別では、1級から4級までは減少していますが、5級、6級は増加しています。

【図 2: 年齢別 身体障害者手帳所持者数の推移】



【図 3: 等級別 身体障害者手帳所持者数の推移】

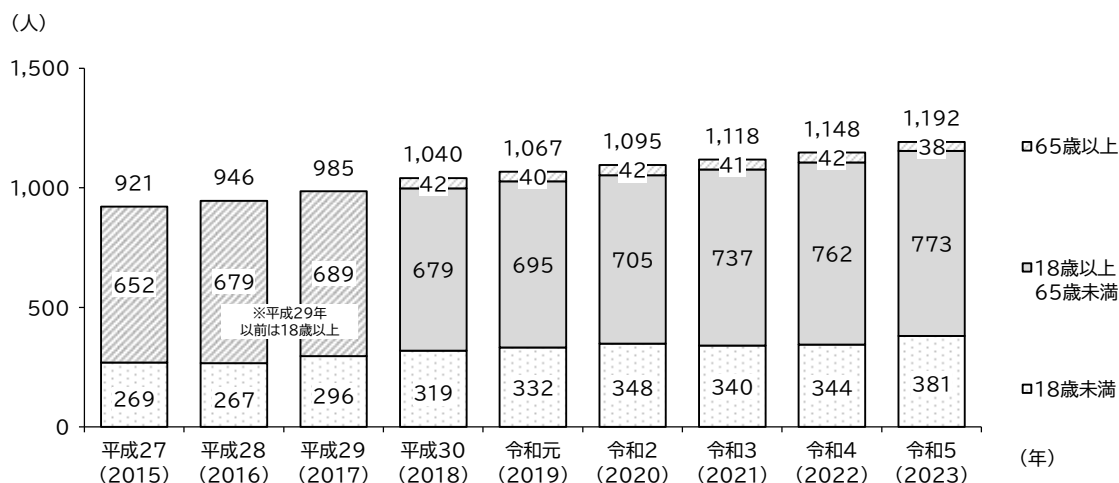


(各年4月1日現在)

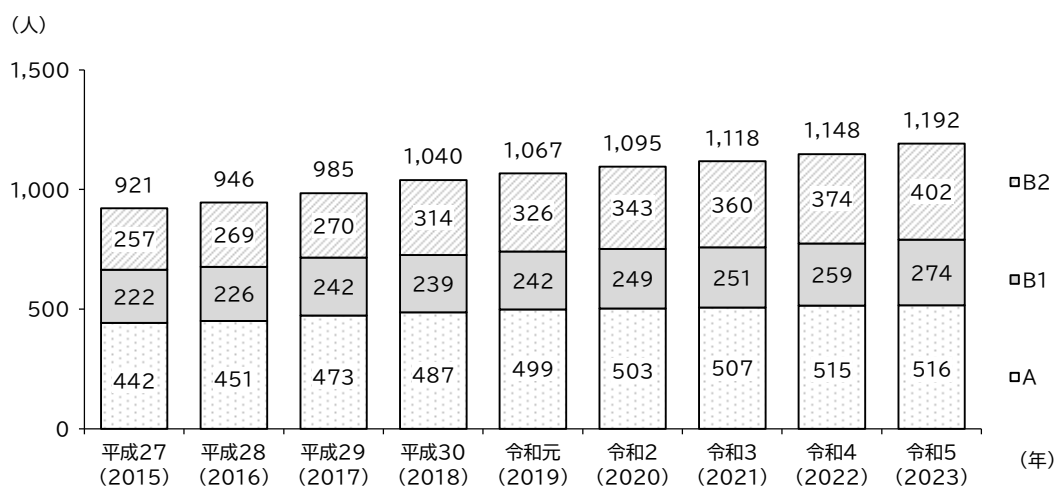
(2)療育手帳所持者数

療育手帳所持者数は、年々増加しており、この5年間で152人増加しています。
等級別では、B1・B2の増加率が大きくなっています。

【図 4:年齢別 療育手帳所持者数の推移】



【図 5:等級別 療育手帳所持者数の推移】



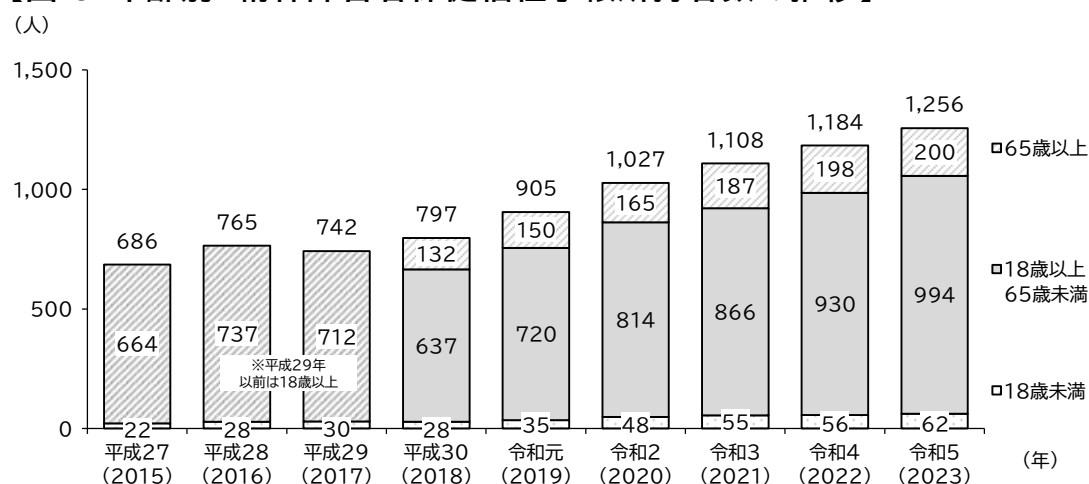
(各年4月1日現在)

(3) 精神障害者保健福祉手帳所持者数及び自立支援医療(精神通院)受給者数

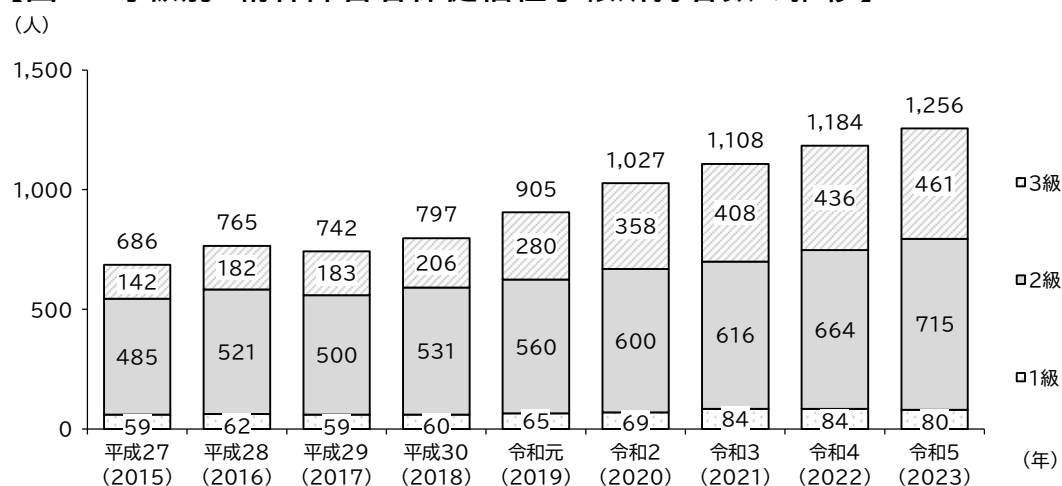
精神障害者保健福祉手帳所持者数は、この5年間で約1.5倍に増加しています。等級別では、3級は2.2倍となっています。

自立支援医療(精神通院)受給者数は、約1.2倍の増加となっています。

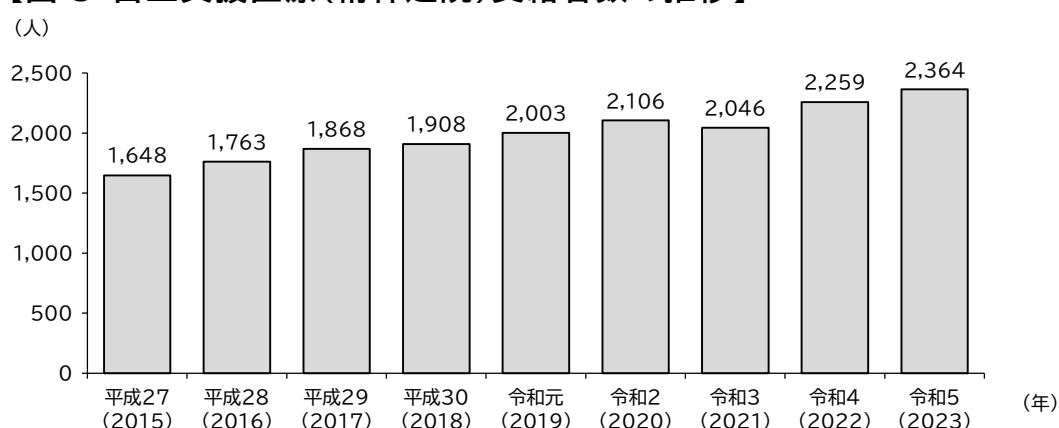
【図 6: 年齢別 精神障害者保健福祉手帳所持者数の推移】



【図 7: 等級別 精神障害者保健福祉手帳所持者数の推移】



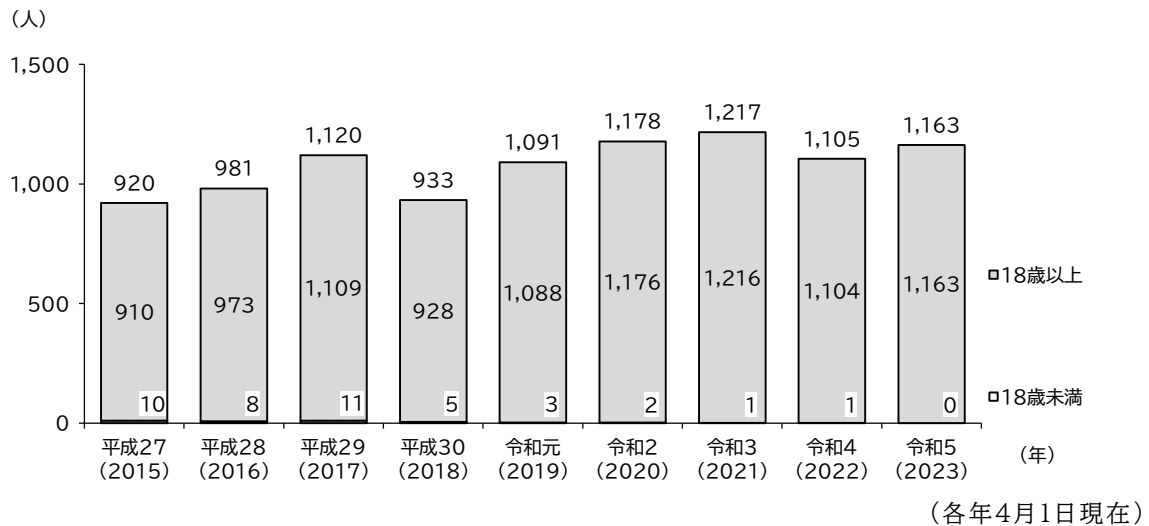
【図 8: 自立支援医療(精神通院)受給者数の推移】



(4)特定疾患医療受給者数

特定医療費(指定難病)受給者数は、令和3年まで増加していましたが、一旦減少し、再び増加しています。

【図 9:特定医療費(指定難病)受給者数の推移】



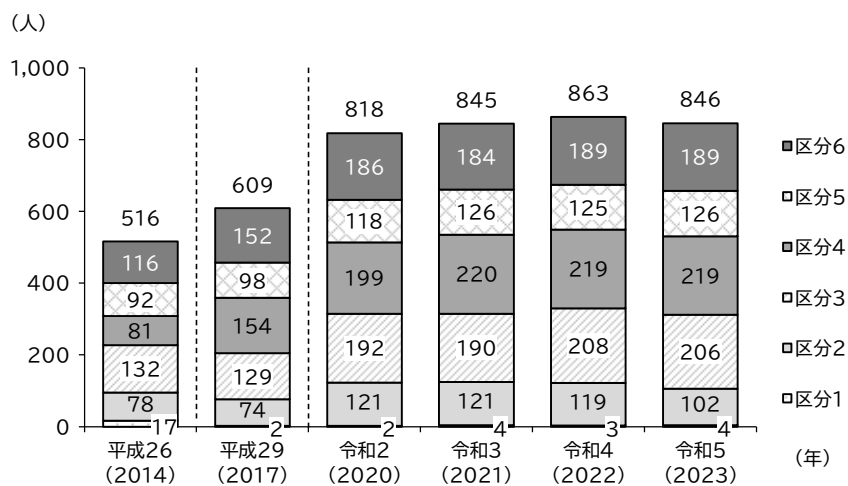
※対象疾患数は、令和5年4月1日時点で338疾患です。

※なお、障害者総合支援法に基づく障害福祉サービス等の対象となる疾病は、令和5年4月1日時点で366疾患です。

3 障害支援区分認定状況の推移

障害支援区分認定総数は846人で、平成26年(2014年)と比べて、約1.6倍となっています。直近3年間は850人前後で推移しています。

【図 10:障害支援区分 認定総数の推移】



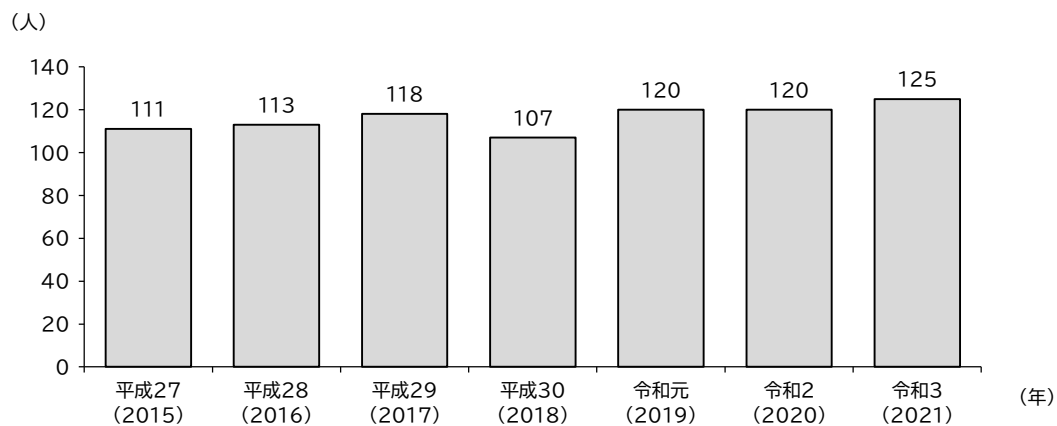
(各年4月1日現在)

※障害支援区分とは、障害の多様な特性その他の心身の状態に応じて、必要とされる標準的な支援の度合いを総合的に示すもので、数字が大きいほど必要な支援の度合いが増します。

4 障害児の就学・就園状況の推移

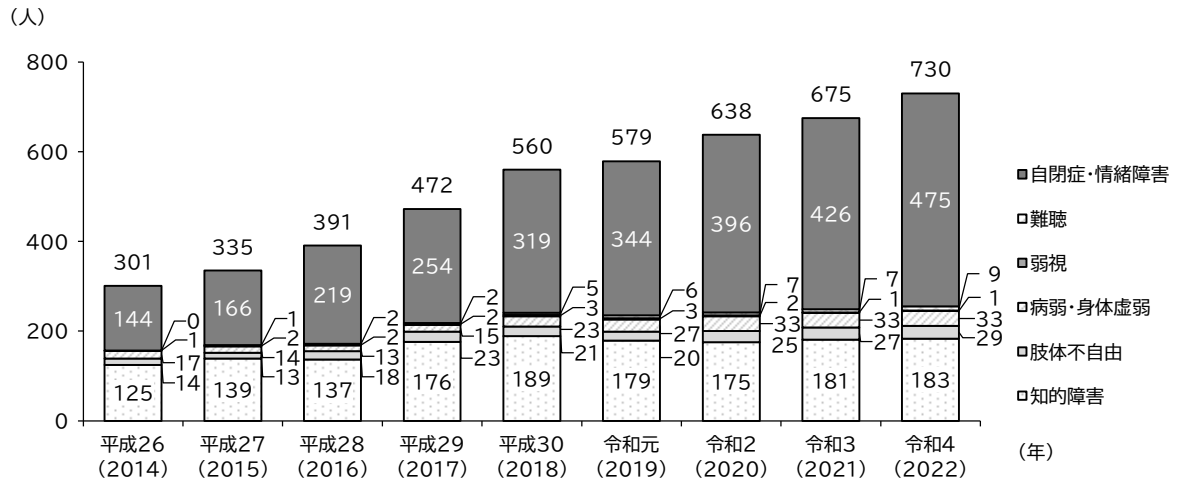
就学前施設（市立保育所、民間保育園、認定こども園、市立幼稚園）における障害児在籍数はゆるやかな増加傾向にあり、令和3年時点で125人となっています。

【図 11 就学前施設における障害児在籍数】

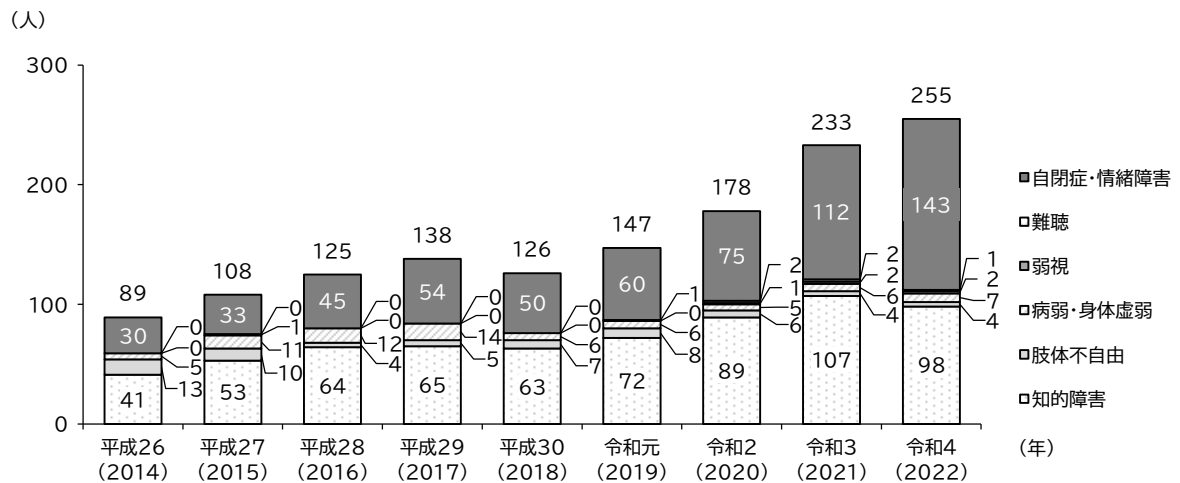


支援学級在籍児童生徒数は、年々増加しています。自閉症・情緒障害の人数が大幅に増加しています。

【図 12:支援学級在籍児童数(小学校)】



【図 13:支援学級在籍生徒数(中学校)】



資料:大阪府「大阪の学校統計(学校基本調査)」

第2章 これまでのふりかえり

(※文中「アンケート調査」は、「箕面市障害福祉に関するアンケート調査」(令和5年2月実施)のこと)

1 生活環境の整備

- 市施設の整備では、バリアフリー等の改善要望を反映する仕組みを導入し、障害当事者によるバリアフリーチェックなども行いながら、多目的トイレの整備、手すり設置などのバリアフリー化・ユニバーサルデザイン化を進めましたが、対応できなかった改善要望もありました。

市内道路の歩道段差解消は未整備の箇所が残っているため、引き続き全面実施に向けた事業実施が必要です。

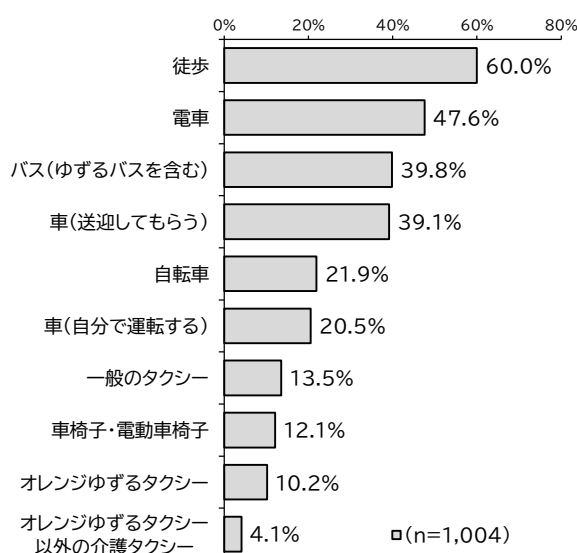
- 移動・外出支援では、オレンジゆずるバスのノンステップ化100%を実施し、福祉有償運送であるオレンジゆずるタクシーによる福祉デマンド輸送のモデル事業を継続しました。

アンケート調査によると、障害者の外出時の移動手段では公共交通機関の利用が多く、今後も移動困難者の支援のあり方について検討が必要です。

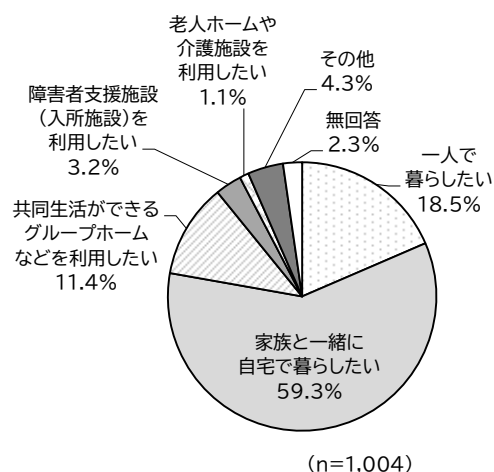
- 住宅施策では、市営住宅申込における倍率優遇の実施、相談支援事業による住宅入居支援(民間賃貸住宅への円滑な入居支援)を行い、箕面市自立支援協議会地域移行・定着支援部会において、ケース共有・課題検討等を実施して地域移行の支援を進めました。

アンケート調査によると、希望する暮らし方として、家族と共に自宅で暮らしたい人、グループホーム等で暮らしたい人、一人暮らしをしたい人など様々な希望があります。今後も、地域で暮らしていくために必要な支援として、困ったときに相談できる体制作りの検討

【外出時の主な移動手段】



【この先5年以内の希望の暮らし】



が必要です。

- 情報バリアフリーの取組では、希望者への個人宛通知文書の点字化、全戸配布する情報について点字版・音声版の発行、市主催行事での手話通訳や要約筆記による情報保障、市ホームページではテキスト版・読み上げ対応PDF版などのアクセシビリティに配慮した情報掲載を進めました。

図書館においては、点字図書・録音図書の提供、音訳ボランティアや対面朗読ボランティアによる活動支援、「声と点字の読書情報」の発行、電子書籍・オーディオブック等の整備などを進めました。

アンケート調査によると、情報収集をする際に求める対応として「わかりやすい言葉で情報提供してほしい」という回答が多く、今後も、障害種別に応じた情報伝達手段の確保、情報提供方法への配慮などが必要です。

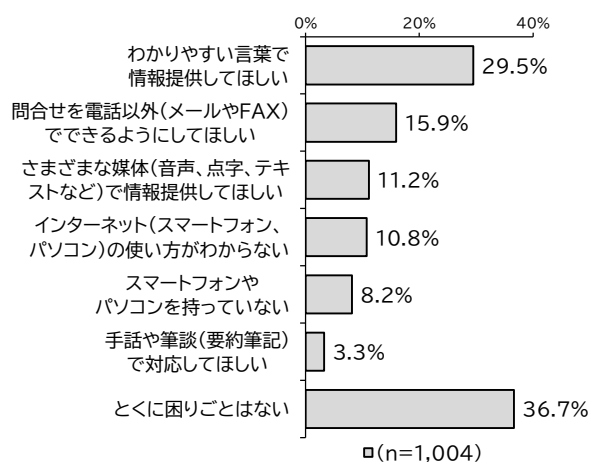
- 防災・緊急時支援として、聴覚障害者に対するファクスや電子メールなどの緊急通報システムの運用、「避難行動要支援者名簿」の整備などを進めました。

継続的に福祉的・医療的ケアがなければ生命維持に支障をきたす方には、「要継続支援者名簿」の作成等に取り組みました。

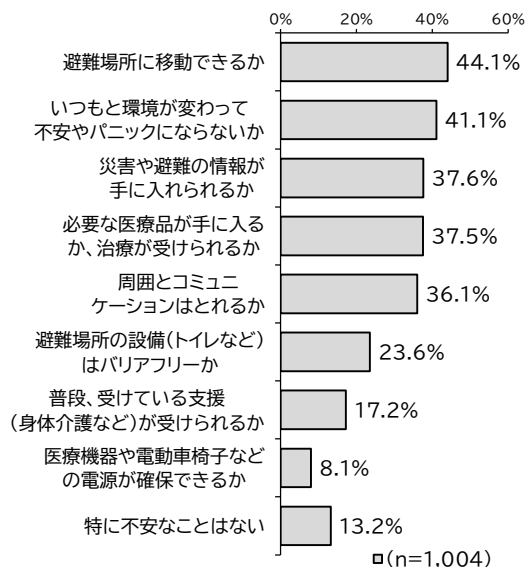
避難所に関する取組では、福祉避難所となる事業者との協定の締結、地区防災委員会においては、避難所運営ゲーム(HUG)等を通じて要配慮者が避難する場合を想定したシミュレーションを行いました。

アンケート調査によると、「災害時の避難で不安なこと」では、避難場所への移動と避難所生活に対する不安が挙げられ、今後も、災害時における障害者の支援体制と福祉避難所のあり方の検討や、障害特性に応じた、災害時情報の伝達手段の啓発が必要です。

【情報収集をする際に求める対応】

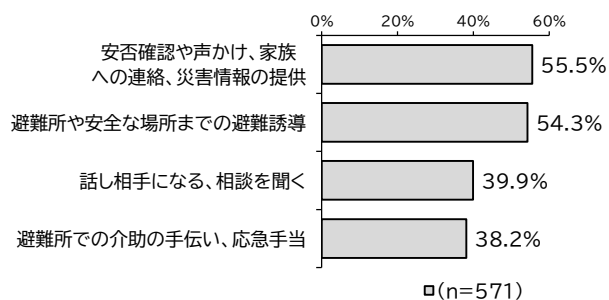


【災害時の避難で不安なこと】



障害者でない市民に対するアンケート調査によると、災害時に障害のある人に対して何らかの支援ができると思う人が一定数いることから、災害時に具体的な支援が行えるような仕組みづくりの検討が必要です。

【災害時に障害のある人に対してできると思う支援】(市民アンケート)



2 雇用・就労の充実

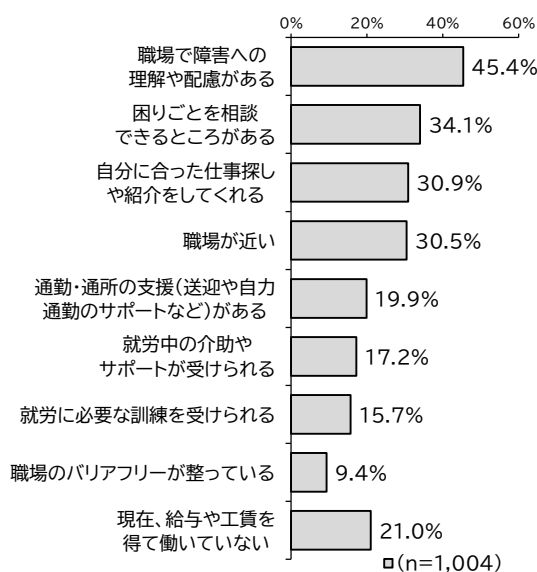
- (一財)箕面市障害者事業団が中心となって関係機関等との連携を図り、求職活動から職場の開拓、職場実習、職場定着までの一貫した支援と、離職時の再就職に向けた取組を実施し、箕面市自立支援協議会の就労系通所事業所情報交換会を通じ、市内事業所の連携を図りました。

アンケート調査によると、継続して働くためには、職場で障害への理解や配慮が必要と考える人が多く、困ったときの相談先や通勤・通所の支援なども求め

られています。今後も、職場での障害への理解促進に関する啓発を行う一方、支援体制の検討が必要です。

- 障害者の職業能力向上のために実施する障害者市民就職支援パソコン講座では、講座受講前の個別相談や、障害の種別や程度などを考慮した受講プランの作成などの支援を行いました。
- 市職員採用においては、障害者別枠採用試験を行っており、令和3年度に障害種別の要件を撤廃しました。令和2年度からは庁内に障害者職業生活相談員を選任し、障害のある職員の職場生活に関する相談・指導等を通じて個々の職場定着を支援しています。今後も、障害特性に配慮した市職員の採用手法や業務の切り出し等の検討が必要です。
- 障害者優先調達推進法に基づいた市の優先調達推進方針をふまえて、障害者の働く場への支援・強化を図るため、優先調達を実施しました。
- 重度障害者の日中活動の場である生活介護の需要を推計した「重度障害者のための生活介護事業所整備構想(たたき台)」を作成しました。必要整備

【継続して働くために必要なこと】



数等について、適宜の再検証を行うとともに、構想に基づく早期整備が必要です。

3 福祉サービスの充実

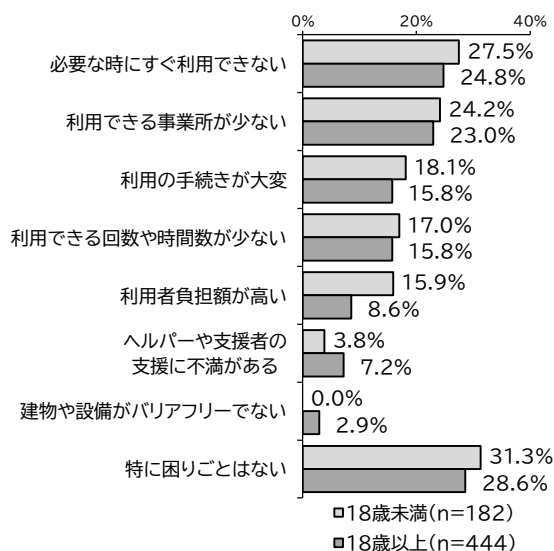
- 相談支援体制では、平成27年4月から「サービス等利用計画」についてすべてのサービス利用者が対象となり、その作成を担う特定相談支援事業所数は、令和5年6月時点で12か所となりました。また、平成29年度から市基幹相談支援センターについて、箕面市社会福祉協議会への委託事業から市の直営事業としました。
- 自立支援協議会の開催により、障害者等の支援体制に関する課題整理と社会資源の情報共有、地域の関係機関のネットワーク構築に向けた協議を行いました。
- 地域の特性や利用者の状況に応じて実施する地域生活支援事業では、必須事業及び任意事業により、移動支援や日常生活用具給付などの障害者の日常生活の支援、権利擁護、意思疎通支援等を行い、重度障害者等就労支援特別事業などの新たな任意事業の実施等、社会情勢に応じて各事業の見直しに取り組みました。
- 障害福祉計画(第4期～第6期)・障害児福祉計画(第1期～第2期)において、国及び大阪府の基本的な考え方にに基づき、障害者の自立支援のための地域生活移行や就労支援、障害児支援の提供体制の整備等において、成果目標と活動指標を設定して、サービスの供給体制の確保に取り組みました。

障害児に対するアンケート調査によると、「放課後等デイサービス」の利用率は高く、今後の利用希望も高くなっています。「短期入所(ショートステイ)」「移動支援(ガイドヘルプ)」は現在の利用は1割程度ですが、3～4割の人が将来的に利用を希望しています。

障害者に対するアンケート調査によると、利用希望の高いサービスは、「移動支援(ガイドヘルプ)」、「共同生活援助(グループホーム)」、「計画相談支援」、「短期入所(ショートステイ)」、「就労継続支援B型」などとなっています。

障害福祉サービスでの困りごとでは、障害者(児)ともに「必要な時にすぐ利用できない」、「利用できる事業所が少

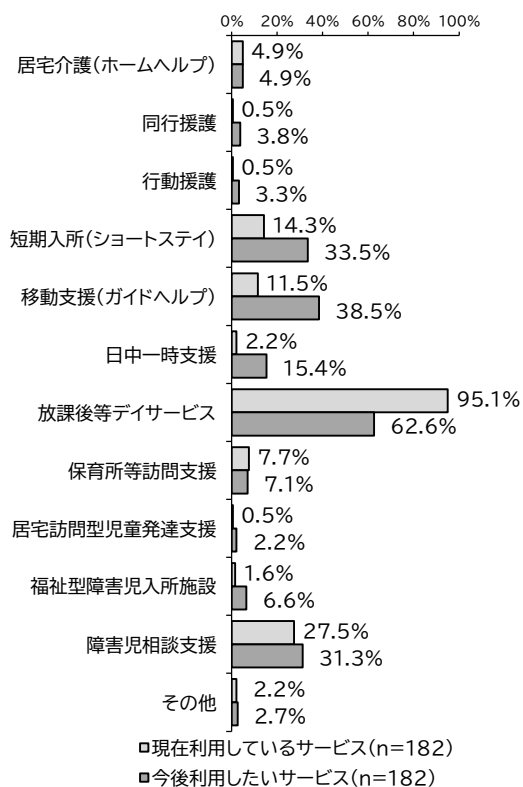
【現在利用している障害福祉サービスでの困りごと】



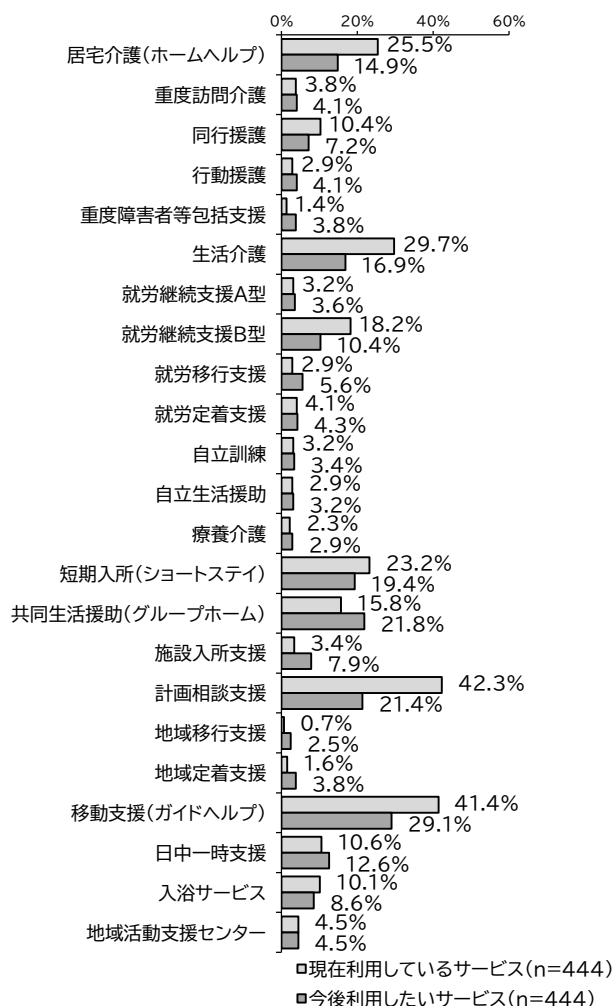
ない」を挙げる割合が高くなっています。

今後も、障害者(児)一人一人の個別ニーズに対応できるサービス提供体制の整備が必要です。

【現在利用している障害福祉サービス、
また、今後利用したい障害福祉サービス
(18歳未満)】



【現在利用している障害福祉サービス、
また、今後利用したい障害福祉サービス
(18歳以上)】



4 保健・医療の充実

- 健康診査等による健康管理を進める上で、障害者を含めた若年層(15歳以上40歳未満)の健康診査受診率向上に努めました。

健康診査実施医療機関や相談支援事業所と連携して、支援を要する市民が、専門的な相談を受けることができるよう、保健師等による訪問面接を行いました。自主的な健康管理が難しい障害者については、相談支援事業所や保健所などと連携して受診・健診等につなげました。

- 市立病院では、急性期・回復期のリハビリテーション及び訪問リハビリテーションを実施し、退院時にはスムーズに在宅生活ができるよう関係機関との調整を行いました。市立病院ホームページの地域医療機関紹介ページに、車い

すでの通院の可否、障害者用駐車場や車いす使用者用トイレの設置状況を掲載し、画面の背景色を変更するなど情報アクセシビリティの向上を図りました。

- 重度障害者医療費助成、障害児(者)個室入院料助成により、医療における経済的負担の軽減を図りました。
- 歯科医療機関への通院が難しい方の相談受付・調整を行う「在宅歯科ケアステーション」(運営:箕面市歯科医師会)の周知を図りました。
- 医療的ケアにかかるサービス提供が可能な事業所への情報提供等により、市内での事業実施につながるよう働きかけました。また、市立障害者福祉センターささゆり園等を活用し、医療的ケアにかかる実地研修を実施しました。
- ライフプラザ内の「えいど工房」において、在宅生活に必要な生活支援機器等の紹介や利用方法の説明等、生活環境の調整支援を行いました。

5 療育・教育の充実

- 支援保育・教育については、市立保育所・幼稚園に支援担当保育士や支援教育支援員、また必要に応じて看護師を配置し、適切な支援を行いました。民間の就学前保育・幼児教育施設においても、支援の必要な子どもに対する保育が進められています。また、子どもすこやか室総合保健福祉センター分室の心理士や療法士が、就学前保育・幼児教育施設を巡回し、個別や集団場面における支援指導を行いました。
- 市内就学前保育・幼児教育施設に対しては、支援保育・教育に関する研修会や研究会を実施し、支援保育・教育の質の向上に努めました。また、令和4年度に開設した「保育・幼児教育センター」において、様々な研修会・研究会の企画・実施や巡回訪問などの実施により、配慮を必要とする子どもへの支援の充実、小学校教育への円滑な移行などに取り組みました。
- 早期療育事業では、児童発達支援事業所(あいあい園)の運営を軸として、専門スタッフによる機能訓練・訓練相談・経過フォロー、巡回相談・訪問を実施しました。

発達相談「ゆう」では、保護者への支援や、就学前保育・幼児教育施設を訪問し、早期療育対象児童の日常生活における適切な支援方法及び環境調整等に関係機関連携のもと行いました。

- 医療的ケア児等については、令和元年度から早期療育事業推進会議、支援連携協議会、自立支援協議会を「医療的ケア児支援のための関係機関の協議の場」としてそれぞれ位置づけ、関係機関との情報共有や連携体制づくりを

進めています。

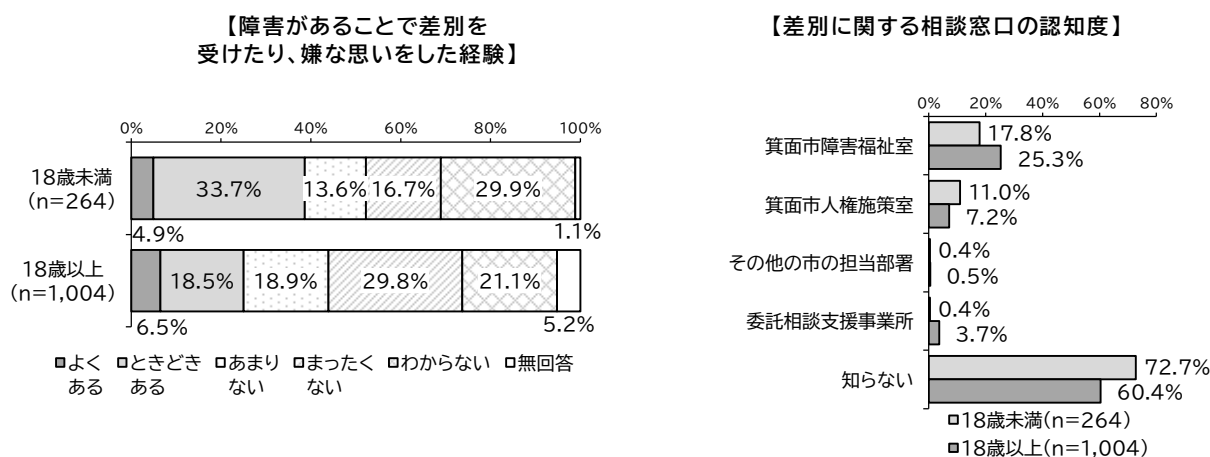
- 支援教育については、就学前に、就学前保育・幼児教育施設から「支援が必要な子ども」の情報を共有し、市教育委員会が全園所を訪問するなど就学後の支援教育につないでいます。引き続き、関係機関との連携を促進し、就学前後における切れ目のない支援体制を構築していく必要があります。

小中学校、一貫校には支援教育支援員を配置し、令和5年度から通級指導教室を全校設置しました。

- 支援学級在籍児童生徒数が増加して、一人一人の教育的ニーズに的確に応える指導を提供する「個別最適な学びの場」の確保が難しくなっている状況があることから、令和3年度に「箕面市支援教育充実検討委員会ワーキンググループ」を、令和4年度に「箕面市支援教育充実検討委員会」を設置し、令和5年2月に「箕面市支援教育方針」を策定しました。
- 放課後等の児童の居場所については、障害児通所支援（放課後等デイサービス）の実施、全小学校の学童保育事業での障害児の受入れ、子どもたちの自由な遊び場開放事業を実施しました。児童が任意で参加する放課後事業では、見守り要員を配置し、児童の安全に配慮しました。

6 権利擁護施策の推進

- 市広報紙における啓発記事の掲載、「みのお市民人権フォーラム」、障害者問題啓発講座等を通じて、障害者の人権啓発について市民に学習機会を提供しました。
- アンケート調査によると、障害があることで差別を受けた経験がある人は、18歳未満で約4割、18歳以上でも4人に1人の割合となっています。一方で、差別に関する相談窓口を知らない人は、18歳未満で7割以上、18歳以上でも約6割と高くなっています。



障害者でない市民に対するアンケート調査によると、障害を理由とする差別や偏見があると思う人が約9割となる一方で、「障害者差別解消法」を知らない人が6割を超えています。

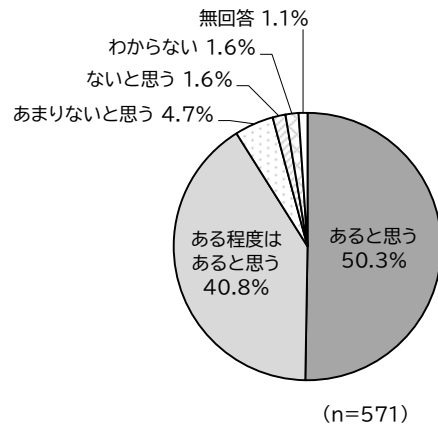
障害者差別の解消や、障害者に対する合理的配慮の提供など、市民に十分周知されているとは言えず、今後も効果的な啓発方法等の検討が必要です。

- 保健福祉サービスに関する苦情処理体制として、各保健福祉サービスを所管する課室に、「苦情解決責任者」「苦情受付担当者」を配置しています。

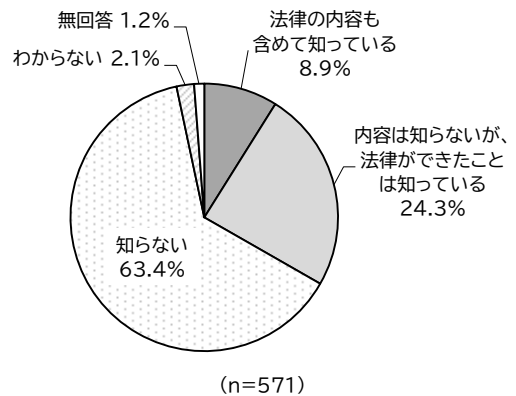
保健福祉苦情調整専門員の助言を受けながら、サービス事業所に対して指導することで事故や虐待を可能な限り防ぐ体制をとり、苦情の解決などに関する取組状況報告書を毎年公表しています。

- アンケート調査によると、虐待を受けた経験がある人が約1割存在します。なかでも精神障害者の割合が多くなっています。今後も「箕面市障害者虐待対応フロー図」に基づき必要な対応を行うとともに、養護者による虐待については、障害者・養護者双方への支援を多職種によるチームアプローチにより行うことが必要です。

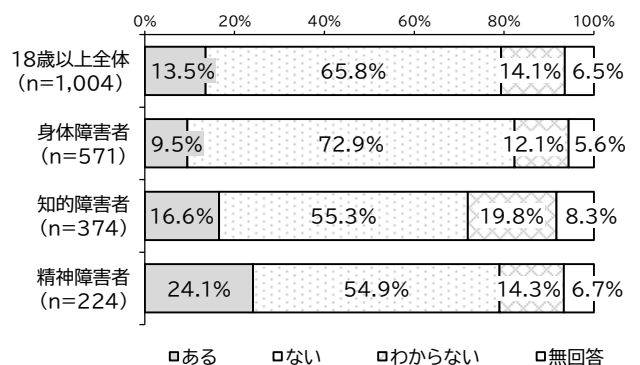
【障害を理由とする差別や偏見があると思うか】
(市民アンケート)



【「障害者差別解消法」の認知度】
(市民アンケート)



【虐待を受けた経験】



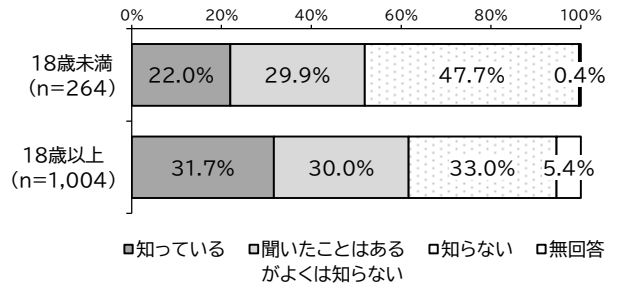
- 平成28年の成年後見制度利用促進法の施行をふまえ、箕面市自立支援協議会における成年後見制度等の研修会の開催、課題共有や制度の周知などを進めました。

アンケート調査によると、成年後見制度を知っている人は18歳未満で約2割、18歳以上でも約3割にとどまり、将来的な利用意向では、知的障害者の2割近くが利用したいと回答しています。今後も、制度の必要性・重要性の周知、箕面市社会福祉協議会が実施する日常生活自立支援事業(まかせてねット)による支援が必要です。

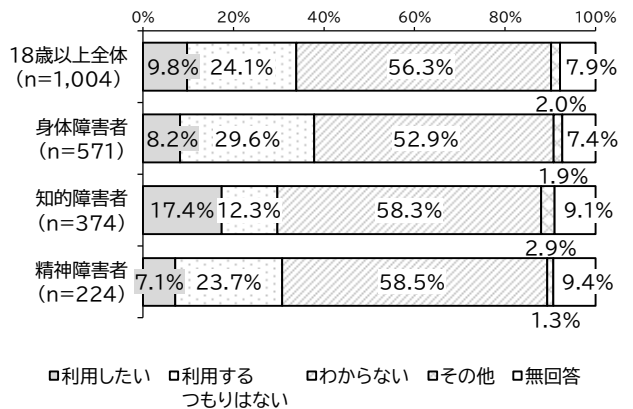
- 障害者でない市民に対するアンケート調査によると、「障害のある人が身近で普通に生活しているのが当たり前だ」という共生社会の考え方を肯定する人は約9割ですが、一概に言えないと思う人が1割弱存在しています。

通所施設やグループホームが自宅の近所にできてほしくないと回答する人もわずかながら存在し、施設コンフリクトの問題が解消されているとは言えない状況です。

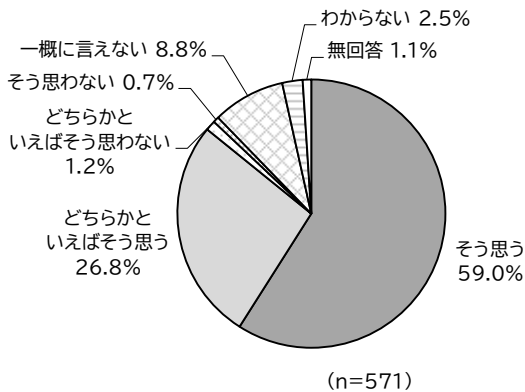
【成年後見制度の認知度】



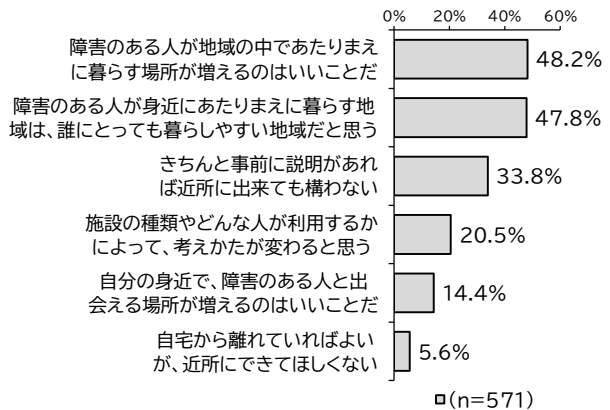
【今後の成年後見制度の利用意向】



【「障害のある人が身近で普通に生活しているのが当たり前だ」という考え方】
(市民アンケート)

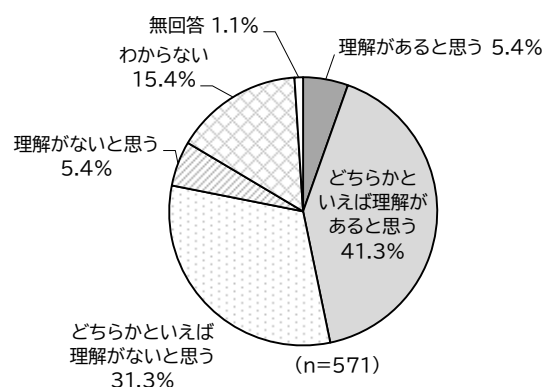


【通所施設やグループホームが自宅の近所にできたとしたら】
(市民アンケート)



また、障害のある人が地域で暮らすことについての社会の理解があると思うと回答した人の割合は5割弱にとどまっています。引き続き、障害者への理解促進に向けた取組が必要です。

【障害者が地域で暮らすことについての社会の理解】



7 スポーツ・文化活動等の社会参加の機会の充実

- 生涯学習センター、図書館、スポーツ施設等のバリアフリー化、トイレの改修等を順次行いました。
- スポーツ活動では、バリアフリー子ども水泳教室、親子体操教室、親子ボッチャ教室などの実施や、「オリ・パラふれあいイベント2022 in 箕面」にてシッティングバレーボール教室、ボッチャ体験コーナーなどを実施しました。
- 文化活動では、市主催の講座等で手話通訳者・要約筆記者の派遣を行い、市立障害者福祉センターささゆり園で障害者対象の茶道・華道教室を開催しました。